北陸の旅 2024

2024 年 4 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

2024 年 1 月 1 日発生した能登半島大地震の復興のために北陸応援割という旅行支援策が実施された。私はそれを利用して友人と一緒に北陸地方を 2 泊 3 日で旅してきた。

■旅が始まる

今回の旅は旅行会社のパッケージツアーを利用した。個人旅行で北陸応援割を使おうとしたが、なかなか予約が取れない。そこでたまたま空いていたツアーに申し込んだ。

ツアーの正式名称は「北陸応援割 高志の紅ガニ・飛騨牛・氷見牛 北陸の十景をめぐる 3 日間」というグルメと十景が売りのものだ。

同行者の小野田さんは、20 年以上も前に私がシステムエンジニアとして会社で大きなプロジェクトを任されていた時にお世話になった人で、当時からの交友が今でも続いている。

東京から飛行機に乗って小松空港に到着し、大型バスに乗り換える。ツアー参加者は 41 名、添乗員は私と同じくらいの年齢で白髪の初老のおじさんだ。

バスの中で添乗員の話が始まる。自己紹介でマイクを持つと止まらないと言っていたが、その通りで実に話題豊富だ。彼はなかなか博学で地理や歴史に始まり、芸能界や動植物にも詳しい。私は彼のことを“物知り爺さま”、それを略して“シリ爺”と呼ぶことしよう。

■知り爺の桜の講釈

バスの中で、シリ爺が桜の花の講釈を始める。桜は先に花が咲いて後から葉が出るタイプと、その逆のタイプがあり、前者つまり花が咲いている時に葉がない桜は“姥桜”と呼ばれる。老婆は歯（葉）が無いからそんな年配女性のことだと言っている。

辞書を引くと「女盛りを過ぎても、美しさや色気が残っている女性」と出てくるから、シリ爺の説はいささか飛躍している。

有名なソメイヨシノも姥桜で、自家受粉せずに全国に繁殖させた。自家受粉は花粉が同じ木のめしべに付くことを言うが、その方法ではなく接ぎ木や挿し木で広めた。つまりクローンを作った。クローンなのでソメイヨシノは一斉に咲き、桜前線も可能になる。

ソメイヨシノの樹齢は約 60 年で他の桜の木に比べて短い。その理由は接ぎ木や挿し木で繁殖させたために種から成長した桜に比べて短くなる。

うーむ、シリ爺説はやはり物知りだ。後で私が調べた内容とほぼ合っている。

■石川県金沢市

石川県金沢市の「近江町市場」にやって来る。ここがこのツアーの十景の最初の第一景ということらしい。ここで昼食になる。

グルメツアー最初の昼食は自由昼食で、私も小野田さんも酒が嫌いな方ではないので食事処に入り、肴とビールがセットになった昼呑みセットを注文する。

刺身と煮魚と珍味のフグの卵の糠（ぬか）漬けが出てくる。フグの卵はかなり塩っぱい。とんでもなく塩が効いている。その理由はフグの卵にも毒が含まれているから卵を 2 年以上糠漬けにして解毒していると店の人が教えてくれる。

【近江町市場の「近江町食堂」の昼呑みセット】　　【フグの卵の糠漬け】

金沢と言えば兼六園が有名だが、その隣の「金沢城公園」を第二景としている。

シリ爺が先導して公園に入り、その後はまた自由散策の時間になる。

私たち 2 人は金沢には何度も来ているが初めて金沢城公園に入る。実はこの公園はかつての金沢大学で、平成になって郊外に移転して現在は金沢城公園として無料開放されている。私たちが来たのが移転前だったのか、あるいは単に見過ごしたか。いずれにしてもこのツアーで見られて得をした気分になる。

【金沢城公園の一角】

公園に隣接して尾山神社がある。この神社には加賀藩の藩祖の前田利家と妻が祀られているというから由緒正しい神社だ。

シリ爺がこの神社の門は一見の価値ありと言っていたので、金沢城公園の散策をほどほどにして尾山神社の神門にやって来る。

そして驚愕の光景がそこにあった。私はその神門を見て興奮している。

興奮の理由は、神門はステンドグラスの窓を持つ3階建ての建物と一体となっており、威風堂々と建っている。和洋折衷の極みかもしれない。

ステンドグラスはキリスト教で、その光の中に神様がいるという教えを広めるための知りで言わば布教の道具だった。それが藩祖を祀る神社にあるのだから信じられない。

【尾山神社の神門】

第三景の金沢市内の「ひがし茶屋街」にやって来る。ここも街の入口から自由散策になる。

風情ある街並みが日本文化の心根の優しさのようなものを感じさせてくれるから多くの外国人観光客が訪れている。しかし最近では何処にでもあるというもので、私にとってはあまり感激がない。

しかしそんな中、観光客が群がっている店がある。

店内で面白いものを売っている。それは金箔アイスクリームで、金価格高騰の昨今においては信じがたいが、アイスクリームに金箔を巻いたものを981円で販売している。

せっかくなので私たちも買って食べる。金属を舐めたようなあの味がする。さすがにこれはグルメには入らないだろう。

【金箔アイスクリーム】

■石川県を走る

石川県羽咋市の「千里浜なぎさドライブウエイ」は、全長約8kmの砂浜の海岸を自動車が走るという面白い道で第四景になっている。

私たちを乗せたバスもこの砂浜の道に侵入していく。私は自家用車では走ったことがあるが、バスで走るのは初めての体験になる。それでも自分で運転するのではなく、運転手は慣れたものなので不安は全く感じない。

しかしここは道路ではなく海岸なので道路交通法が適用外のため、違法駐車や右側走行などやりたい放題で困っているとシリ爺がこぼしている。

【千里浜なぎさドライブウエイ　この上をバスが走る】

時々屋根にブルーシートがかかった家がある。今は 4 月だが、1 月の地震の爪痕がまだ残っているのだろう。しかしこれは十景には入らないだろう。

■富山県に泊まる

バスは富山県に入り、今宵泊まるホテルにチェックインする前に、富山県の氷見温泉郷の夕食会場に案内される。

ブリの刺身、氷見牛のすき焼き、白エビの天ぷらなどの料理が並んでいる。グルメ旅をテーマにしているので当たり前と言えばそれまでだが、北陸の定番料理が出てきて落ち着く。

【氷見温泉郷「磯波風」で夕食】

宿泊は越中となみ野温泉にある「メルキュール富山砺波リゾート＆スパ」で、周辺には何もない山の中のホテルで、今回はここに 2 連泊する。アクセスが不便なので大型バスやマイカー客をターゲットにしているのだろう。外国人の団体旅行者がたくさん泊まっている。

この宿はオールインクルーシブ（飲み放題）が売りで、ラウンジで 18 時までビール、21 時からは焼酎やウイスキーも飲み放題になっている。

夕食を済ませて 20 時 30 分頃に到着した私たちは、風呂上りの一杯のはずが、ラウンジに居座って飲み続けることになる。

■岐阜県の白川郷

ツアー2 日目に入る。朝食はビュッフェスタイルだが、スパークリングワインが置いてある。私たち 2 人とも嫌いな方ではないので朝からいただく。そして心地よくバスに乗りこむ。

第五景として合掌造りで有名な世界遺産「白川郷」にやって来る。ただし白川郷は岐阜県だから北陸地方ではない。つまり北陸支援にならない。

その言い訳にシリ爺は「岐阜県北部の山岳地域は近年の高速道路開通で北陸からのアクセスが飛躍的に良くなっており、むしろ東海地方からやってくるよりも近い」などと言っている。まあ宿泊が北陸の富山県なので、細かいことは言わないでおこう。

駐車場には大型バスが 50 台くらい停まっているから、合掌造りの家並みは観光客で溢れている。観光客は日本人よりも外国人の方が圧倒的多く、中国人や欧米人に次いでインド人も目に留まる。

ここでも観光は各自楽しんで下さいというスタイルをとっている。確かに 41 人も連れて歩くにはシリ爺も大変なのだろう。それでもツアー参加者は旅慣れた人が多いから、勝手に観光をして全員が集合時間の 5 分前には必ず戻ってくる。

時間に正確、いや時間に厳しい日本人の特性を感じる。実は 1 カ月前に台湾を旅行していて現地の人から日本人は“時間に厳しい”と感想を聞いたが、その言葉を思い出した。

シリ爺のアドバイスで白川郷を見渡せる展望台があるというので、展望台に登る。

展望台からは合掌造りの家並みと街の全景を観ることができる。実に見事で、このアングルで合掌造りの家々が撮影できることにシリ爺に感謝だ。ついでに講釈で聞いた姥桜が見頃になっている。

【白川郷】

たまたま戸が開いていた民宿「幸ェ門（こうえもん）」の若女将と話すことになる。私は冬の雪深い時に合掌造りの民宿に泊まりたく、単刀直入に「真冬も営業しているのですか？」と質問を投げかける。

彼女は「真冬でも合掌造りの内部は暖かく快適で、深々とした雰囲気が幻想的でいいですよ」と言っている。「バスも運行しているから是非来てください」と言われるが、連泊はお断りしているとのことで、どうやら連泊は料理に困るのが本音のようだ。そんな時は近くにあるトヨタ自然学校を勧められる。あのトヨタの系列の宿で、フランス料理のもてなしが民宿とはまた違うから隠れた穴場だと教えてもらう。これで 2 泊 3 日冬の白川郷の旅行プランができる。

■飛騨高山

昼食は飛騨高山のレストランに入り、「飛騨牛朴葉味噌焼き・飛騨豚しゃぶしゃぶ・龍の瞳釜飯」というコース料理をいただく。氷見牛が飛騨牛になり飛騨豚まで登場している。そしてこの地のブランド米“龍の瞳”も出てきた。もはや北陸応援は何処へ行ってしまったのか。

【飛騨牛朴葉味噌焼き】

【飛騨豚しゃぶしゃぶ】

【龍の瞳釜飯】

飛騨高山の市街地にやって来る。ここが第六景ということで、やはり自由散策になる。

飛騨高山は日本三大曳山祭（ひきやままつり）のひとつの高山祭が有名で、曳山という背の高い大きな山車（だし）を人力で引き回す祭になっている。ちなみに日本三大曳山祭の他の２つは、京都の祇園祭と秩父の夜祭になる。私は秩父の夜祭は行ってことがあり、花火と出店の多さに驚いたが、山車にはあまり目が行かなかった。

高山祭で実際に使われた本物の山車を展示してある「高山祭屋台会館」にやってくる。入場すると、勇壮で豪華な大きな山車が何台も置かれている。

ここもシリ爺お勧めの施設で、外国人観光客で混雑している街の中よりも空いていて、飛騨高山を感じることができると言っていたが、まさしくその通りで入館者も少ない。

【高山祭屋台会館の山車】

会館の隣に祭の起点になる「桜山八幡宮」がある。拝殿も本殿も鳥居も趣のある造りをしており歴史を感じさせてくれる。観光客がいない参道を歩いていると人力車に乗った観光客が横を通り抜けて行く。これは風情あって心和らぐ気分になる。

【桜山八幡宮の人力車が走る参道】

■再び富山県に泊まる

観光が終わり、昨日のホテルで連泊になる。本日はホテルの夕食を食べる。

ラウンジでは18時まで生ビール飲み放題だが、18時からの夕食は飲み放題ではないだろうと、私も小野田さんも勝手に解釈してしまう。私たちは大急ぎで温泉入浴を済ませてラウンジに行き、ビールを飲む。これが至福の時というものだろう。他のツアー客に「もたもたしているとビールが飲めないぞ」などと聞こえない声で言いながら、ビール3杯を飲み干す。

しかし夕食会場に行くと、生ビールはもちろん、焼酎、ワイン、日本酒が飲み放題になっている。こんなことならゆっくり温泉に浸かって夕食に来れば良かったと反省しきりだ。

事前に確認しない私たちが悪いのだが、シリ学爺が夕食も飲み放題だと教えてくれれば、こんなことにはならなかったと八つ当たりをする。策士、策に溺れるを実感する。

3日目の朝もスパークリングワインで、いい気分になってバスに乗る。

朝一番の第七景は、富山県砺波市の「チューリップ四季彩館」で、この季節なので園内にはチューリップが咲き誇っている。

しかしこの施設を出て、近くの農家の畑でチューリップを大々的に栽培している。これは凄い！と思ったがあまりに赤が鮮やかで、これはカーネーションかもしれない。

【チューリップ四季彩館の園内】

【チューリップ四季彩館近くの農家の畑】

■富山県のグルメ

新湊の「新湊かに小屋」と「きっときと市場」に案内される。

私は知らなかったがシリ爺の説明によれば、高志の紅ガニ（こうしのあかがに）は富山湾で獲れるズワイガニのことで、同じズワイガニでもブランド品の越前ガニや松葉ガニよりも下に見られることも多いが、味はなかなかなのもだとバスの中で教えてくれていた。

かに小屋は天井の高い倉庫で、ベニア板の簡単なテーブルとビール瓶のケースに座布団を乗せた椅子がある。その椅子に座るとすぐに茹でたての高志の紅ガニが出てくる。店の人に食べ方を教わって食べ始める。

【新湊かに小屋】

【茹でたての高志の紅ガニ】

茹でたてで温かくて非常に美味い。今回のグルメツアーの中で最高だと私は思う。正直言って山陰で食べた松葉ガニよりも美味い。おそらく茹でたてのせいだろう。そう言えばバスの中で、「あと何分で着く」とシリ爺が小まめに電話していた。

このカニはツアー料金に含まれているので値段が分からない。店の人に普通に食べた場合の値段を聞くと 2500 円という返事が返ってくる。これは思っていたよりも相当に安い！

松葉ガニや越前ガニに比べて漁獲期間が長く、秋から春まで食べられる。でもやはり冬が美味いから、昨日行った冬の白川郷と合わせた旅行プランが私の頭の中で組み立てられる。

時間はまだ 11 時を過ぎたばかりなので、このカニは昼食ではないらしい。昼食は隣の「きっときと市場」で自由に食べて下さいとシリ爺が言っている。

私たちは市場に行き、富山湾と言えばホタルイカなので刺身をいただく。やはり沖漬けや冷凍でない生のホタルイカは美味い。

【ホタルイカの刺身】

■富山県で第八景から第十景、そして番外

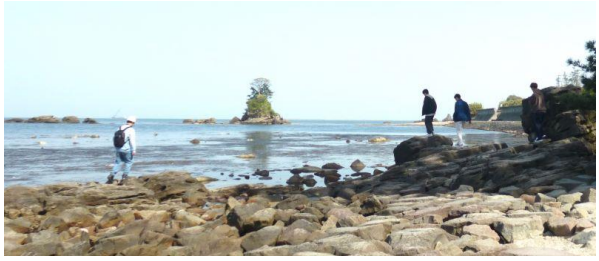
第八景は高岡市の「高岡大仏」で、これが日本三大仏の一つとシリ爺は言っている。しかし明らかに奈良の大仏や鎌倉の大仏に比べて見劣りする。「言った者勝ちだね」と小野田さんがつぶやく。

ちなみに高さは高岡大仏が 7m、奈良の大仏が 15m、鎌倉の大仏が 12m になっている。

【高岡大仏】

第九景も高岡市内で、風光明媚な「雨晴海岸」になる。

源義経が奥州平泉に向かう途中で立ち寄った海岸で、晴れていれば立山連峰が富山湾越しに大きく見えるはずだが、残念ながら黄砂の影響で何も見えない。仕方なく近くに貼ってあるポスターを写真に撮る。



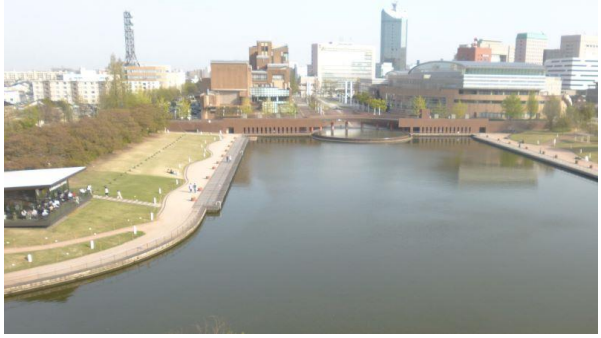
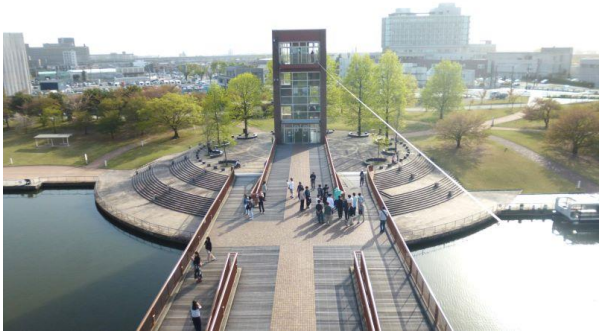
【雨晴海岸から見る立山連峰方向】

【雨晴海岸から立山連峰を見たポスターの写真】

第十景の「富岩運河環水公園」は、富山駅近くなので地元の人の憩いの場になっている。かなり広い公園で、運河の真ん中に島があって橋が架かっている。橋の橋脚を利用したエレベータ付きの展望台がある。

私たちは展望台に登り、周囲を見渡すが、富山市の中心街は見えても海は見えない。ここから富山湾まで直線で約 6km もあるから見えないのは当たり前かもしれないが、そんなに遠くまで運河が延びているのには何か理由がありそうだ。

近くの説明看板を読む。江戸時代、富山港の岩瀬地区は北前船で賑わっていたが、岩瀬地区から富山城のある富山市中心部までは遠くて不便だった。そこで岩瀬地区と中心部を結ぶ運河工事を 1930 年（昭和 5 年）に着工し、4 年後に完成させた。

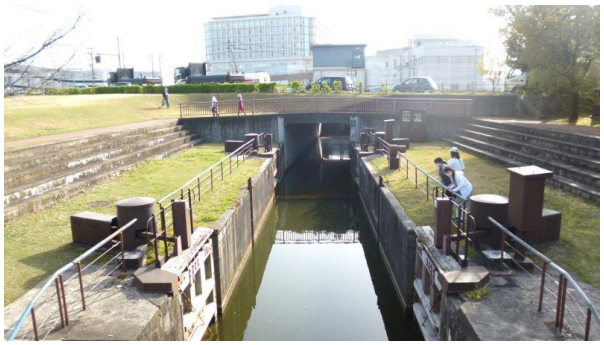
【富岩運河環水公園の展望台からの眺め】

運河のすぐ隣に神通川の支流のいたち川が流れている。ここも繋がれば便利だが、川の水位の方が運河の水位よりも 65cm 高いので、単純には繋げない。そのために牛島閘門を設けた。

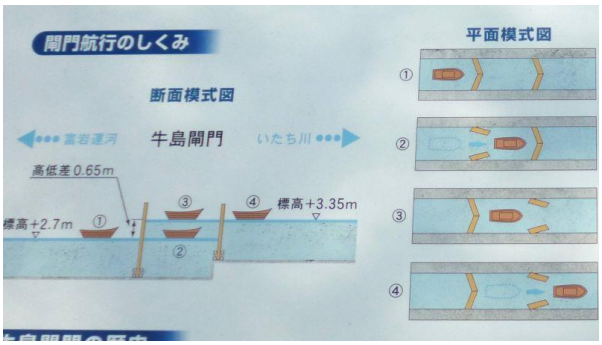
閘門の原理はこうなっている。運河から川に行く場合は閘門に船が入ると扉を閉めて、閘門内に川から水を引き入れて水位を川と同じにして川側の扉を開けて船は川に出る。反対に川から運河に入る場合は扉を閉めた後に閘門の水を運河に流せば運河の水位になる。扉の開閉に人力か動力が必要だが、水は引き込むか流すだけなのでポンプは必要ない。

実はこの方式はパナマ運河と同じで、私はこんなところで同じようなものを見られるとは思いもよらなかった。おそらく 1914 年完成のパナマ運河を参考にしたのだろう。

このことをシリ爺が事前に説明してくれていたら他のツアー客ももっと興味を持ってくれたのに少し残念な気がする。



【牛島閘門】



【閘門の仕組み】

最後は富山空港から東京羽田空港に向けてのフライトになるが、この富山空港が十一景、つまり番外と言っていいだろう。

その理由は、何と、滑走路が神通川の河川敷に造られている。そして滑走路以外のターミナルビルや管制塔は河川敷ではなく堤防の外にある。

そんな飛行場を私は見たことも聞いたこともないが、小野田さんは仕事でこの飛行場を何回か使ったことがあるというので、懐かしんでいる。

私たちは長いボーディングブリッジを歩き、堤防を越えて河川敷に駐機してある飛行機に乗り込み、富山空港を後にする。

【富山空港　河川敷の滑走路　堤防　ボーディングブリッジとターミナルビル】

■旅の記録

実施は 2024 年 4 月 17 日（水）～4 月 19 日（金）の 2 泊 3 日、その行程を示す。

・1 日目　羽田空港 10 時 25 分→小松空港 11 時 25 分（実際は機材遅れで 1 時間遅延）
以後バスで移動、「金沢近江町市場」の「近江町食堂」で昼食、「ひがし茶屋街」、「金沢城公園」、「千里浜なぎさドライブ」、氷見温泉郷「磯波風」で夕食、
「メルキュール富山砺波リゾート＆スパ」宿泊

・2 日目　9 時ホテル出発、「白川郷」散策、飛騨高山の「祭の森食祭館」で昼食、
「桜山八幡宮」参拝、「高山祭屋台会館」見物、ホテル連泊

・3 日目　9 時 30 分ホテル出発、砺波の「チューリップ四季彩館」に入場し見物、
新湊「新湊かに小屋」で高志の紅ガニを食べ、「きっときと市場」で昼食、
高岡の「高岡大仏」拝観、「雨晴海岸」見物、富山市の「富岩運河環水公園」見物
富山空港 18 時 15 分→羽田空港 19 時 25 分（実際は機材遅れで 30 分遅れ）
21 時 30 分帰宅

費用の合計は 1 人当り約 5 万 4 千円、詳細は以下に示す。

・旅行会社（阪急交通社）に支払った費用　45740 円
（ツアー料金 75000 円＋国内空港施設使用料 740 円－北陸応援割 30000 円）

・その他　約 8000 円
（ツアー料金外の昼食 2 回、飲み物代、自宅～羽田空港の交通費など）